

京都精華大学 広報誌

木野通信

issue 70
2018 Jan.

KINO PRESS.
KYOTO SEIKA UNIVERSITY

News & Topics

学長が振り返る あのころのセイカ
特別対談 多様性とめざすべき社会

特集
『木野通信』で振り返る
京都精華大学の50年



□ 特集

『木野通信』で振り返る京都精華大学の50年

若者たちが社会のあり方に異議を唱え行動した時代のさなか、1968年に京都精華大学はその前身、京都精華短期大学として誕生しました。初代学長の岡本清一は、大学に集う人々の人間的な信頼関係の創出や交流を重視し、当時の常識を覆すような新しい大学の創造をめざしました。

開学から約半世紀、京都精華大学の「今」を伝えてきた『木野通信』は未来へのマイルストーンでもあります。国内外から注目された数々のトピックスを、貴重な創刊号から振り返ってみましょう。

協力：ポピュラーカルチャー学部ファッションコース3年 横田奈那



『木野通信』創刊

「大学は学問と教育と深い友情とを発見する場所である」「われわれの大学は新しい画布のように、一切の因襲的な過去から断絶している。そして教師も学生もすべて、まず人間として尊重され、自由と自治の精神の波打つ新しい大学を、これから創造していこうとしているのである」。初代学長の岡本清一は、開学にあたって、このように「自由自治」と「人間尊重」を高々と宣言しました。大学草創期、開学翌年の11月に発行された『木野通信』創刊号には気概にあふれた文章が数多く掲載され、当時の大学構成員の

新しい大学づくりへの理想が強く読み取れます。

洛北・木野の里に産声をあげた小さな短期大学に理想を求めて集った皆が、この『木野通信』を読んだことでしょう。岡本初代学長が唱えた理念は、時代ごとに京都精華大学の構成員たちがその意味を考えなおし、継承と発展に努力を続けています。



『木野通信』創刊号の題字

4年制大学を開設

京都精華短期大学の開学から11年を経た1979年4月、4年制の美術学部を設置した京都精華大学が開学しました。この年発行された『木野通信』第8号では、「信愛」のこころを再び、京都精華短大10周年京都精華大学開学記念祭開催にあたって」と題した特集が組まれ、短大創立以来の願望であった4年制の美術学部開設についての教職員や在学生、卒業生たちのメッセージが掲載されました。開学時は100人ほどだった在学生数

『木野通信』創刊号より
『木野通信』解説

洛北、木野の里に新しく誕生した京都精華短期大学がある。深く山懐にいだかれ、山肌をけずり、鰻の寝床のような谷あいにも長く坂道をつらね、木緑に包まれた自然は美しい。今は名もなき木野の里だが、歳月を重ねるうちに、この自然も多くの変化を遂げて行くことだろう。そこには未来への限りない夢がはぐくまれる。木野は昔から世に広く名を知られる岩倉にある。まだ土地の人にはか知られない名前だが、この名を大切に『木野通信』を世に送ろう。カットは本学美術科、吉富康夫講師にお願いをした。

『木野通信』創刊号より
岡本清一「大学選択心得帳」

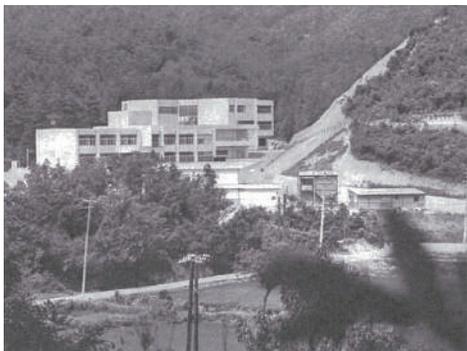
「偉いということは、どういうことなのだ。地位が高くて、みんなから偉い人だといわれている人で、まるでつまらない人間が、たくさんいる。そうかと思うと、小さな山の村へ行ってもハッと驚くような立派な人に出会うことがある。その人は物判りがよくて、判断がしっかりしていて、村の若者がなついているといった人だ。貴方がなりたいと思う偉い人とは、どういう人なのか」

『木野通信』第2号より
『牛皮製の卒業証書』

「あなたが京都精華短期大学において友愛の精神を養い——」で始まる卒業証書の文章は岡本学長の起草であり(中略)本学の基本的教育方針である、「自由・自治主義」は結局のところ人間尊重ということにいきつく。「友愛の精神を養う」ことも「自由・自治主義」を基礎にすえなければ不可能なことである。

『木野通信』第8号より
岡本清一「10の十年」

「大学はどう成長すべきか。(中略)われわれの大学は如何なる志をもつべきか。それは大学という組織体に、独りで生れるものではなく、この大学の一人一人の者が、自分の志をもつことから、はじめられるべきだと存じます」



1970年代の校舎



牛皮製の卒業証書

はそれから50年を経た今、30000人を突破しており、これまでに2万2000人を超す卒業生がここから羽ばたいていきました。また、留學生比率は全在學生の1割近くに上り、多くの留學生たちも共に学んでいます。本学は多様性尊重の時代を、これからも先導していく大学をめざしています。

人文学部の開設

1989年4月、短大にあった英語英文科が発展し、京都精華大学に新しく人文学部が発足しました。発足時には、「人文学部開設記念洋上セミナー」と題し、瀬戸内海から対馬、種子島と九州一円を3泊4日で巡る船旅が行われました。教員による小セミナーや在学生による討論会、さらには船内ディスコまで出現。寄港地では地域の人たちとの交流会なども行われました。

学部を丸ごと洋上に移した開設記念セミナーを経て、間もなく人文学部は誕生から30年を迎えます。現在は文学・歴史



フィールド・プログラム



人文学部開設記念洋上セミナー

史・社会の3専攻を有し、3年次の前期には1学期間本学キャンパスを離れて国内の他大学や海外の大学で学ぶ「フィールド・プログラム」を実施しています。学外へと飛び出して、五感を通して学ぶ人文学部の伝統は、今なおしっかりと息づいています。

『木野通信』第13号より
笠原芳光「洋上の虹」
「対馬から種子島へむかって南下している時、『洋上に虹が出ています』というアナウンスがあった。甲板に上がってみると、暮れなずむ海のうえに大きな虹がかかっている。しかも二重の虹である。水平線から水平線へと弧を描く虹を初めて見た。学生たちは顔をほころばせ、歓声をあげている。外国人留学生もこの壮大なレインボーに見入っていた。あの虹はなんの徴だったのだろうか」

創立当初から推進するグローバル教育

21世紀に入り、グローバル化が叫ばれるなか、『木野通信』第34号では「国際主義」をテーマにした特集を掲載しました。初代学長の岡本清一は、教育の基本方針に関する覚書のなかで、「大学における教育の一切は新しい人類史の展開に対して責任を負い、日本と世界に尽くそうとする人間の形成にささげられる」と謳っており、ここからも国際主義は本学の教育方針に通じるものとわかります。また1989年の人文学部の開設にあ

たっても「学際主義」「体験主義」とならんで「国際主義」を掲げており、本学は一貫してグローバル教育を推進してきました。現在、世界約25の国・地域から約300人の留学生が本学に集い、国際学生寮・修交館やC(アイシーキューブ)といった施設も学内に備え、異なる価値観や文化を背景に持つ学友たちが交流を深めています。インターネット上だけではなく、人間同士の交流がキャンパスを舞台に日々繰り返られているのです。



上/2017年3月に完成した国際学生寮・修交館
中/約25の国・地域の留学生と日本人学生が交流するC(アイシーキューブ)

社会に開かれた「情報館」オープン

教育・研究機関として、その環境の充実に取り組み続けている京都精華大学。今からはるか20年以上も前に、図書館機能に加えマルチメディア時代に対応した機能を兼ね備えた施設として「情報館」を開設しました。現在は約25万冊を越す蔵書や、DVD・CDといったメディア資料なども豊富に所蔵し、学生や教職員の研究や制作において強い味方となっています。人文・芸術系学部を併せ持つ本学の図書館として、



情報館

情報館が収集する資料は幅広く、人文社会科学系の分野はもちろん、美術書や図録、写真集、京都の伝統産業である美術・工芸品の所蔵も充実。本学の特徴ある学部構成と研究分野に見合った個性的な蔵書構成となっています。

また、広く社会に開かれていることも情報館の大きな特徴の一つです。利用者カードをつくれれば、学外の方も資料を借りることが可能です。卒業生の方もお気軽にご利用ください。

「自由へのメッセージ」世界発信！

創立30周年記念事業の一環として行われたのが「自由へのメッセージ」。自由のために闘い続ける人々が、命をかけてまで求める自由とは何か。ノーベル平和賞を受賞した、アウンサンスーチー、ジョゼ・ラモス・ホルタ、ダライ・ラマの3名に本学職員が独自インタビューを敢行。録音した貴重な内容は、世界へ向けてインターネットで公開されました。その後、非宗教系団体として初めて

ダライ・ラマを日本に招くなど、京都精華大学はさまざまな圧力に屈することなく、建学の理念ともなっている自由について、社会に問い続けてきました。

現在もアウンブリーアワー講演会や岡本清一記念講座などの取り組みで、大学としての使命感を持って、その時代にふさわしいゲストを招聘。『木野通信』にはその都度、ゲストの方々の熱いメッセージを掲載しています。

『木野通信』第30号より 京都精華大学30周年記念事業「自由へのメッセージ」



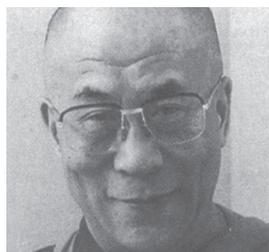
アウンサンスーチー

視野を広げ、同胞意識を持って全世界を受け入れること、他人の困難を感じとることのできる、より大きな心を持つことが大切だ。世界で起こる残虐行為や悲劇は、自己中心的考えと、人間の諸問題に対する理解力の欠乏が根拠となっている。だから若者が持つべき目標は広い心を得ることだろう。



ジョゼ・ラモス・ホルタ

とにかく勉強すること。貧困、独裁の犠牲者などに鈍感では、人生が空虚なものになり、仕事や利益のための単なる機械のような人間になってしまおう。だからとにかく勉強をすること。勉強、勉強、勉強。そして人間の尊厳への視点を失わないことだ。人間の尊厳への視点は人生を豊かなものにする。



ダライ・ラマ

壮大なことをする必要はない。それは時として大きすぎ、失敗の前触れとなる。最初は小さな規模からはじめ、他へ良い模範を示し、そうすることでより多くの人が引き付けられ、集まってくるだろう。そこに協力が生まれる。あなたがたの活動の成功を祈願する。良い動機、良い協力を与え、それが大切なのだ。

日本初のマンガ学部が誕生！



京都国際マンガミュージアム

「2006年、京都精華大学が大きく変わる」と『木野通信』第40号は伝えました。日本初のマンガ学部の誕生です。本学が日本初のマンガクラスを開設したのは1973年。当時はまだマンガに対する社会の認識は、今ほどあたたかいものではありませんでした。それから現在にいたるまで、京都精華大学はまさにマンガ教育・研究の分野を開拓してきたといえます。2006年には京都市との共同事業として、「京都国際マンガミュージアム」を旧龍池小学校の校舎をリノベア

ションして開設。また、2017年には「新世代マンガコース」を新設するなど、常にマンガ教育の分野においてフロントランナーであり続けています。国際的に日本のマンガが注目されている今、長いマンガ教育・研究の蓄積のある本学に、大きな期待が寄せられています。

40年近く続く「伝統産業実習」

1979年、4年制美術学部の開設と同時に、「京都の伝統産業実習（学外実習）」の開講がはじまりました。この実習では、多くの実習先にご協力をいただき、学生が京都に息づくさまざまな伝統産業の現場で直接指導を受けます。現代に生きる伝統にじかに触れることのできる特別な実習プログラムです。開講当時は、大学の正規カリキュラムでこのような制度を取り入れているところはめずらしく、授業開設から10周年となる1989年に発行された『木野通信』第

13号ではプログラムスタート時から関わった教員の声を紹介されています。また、この授業は2004年と2005年に文部科学省の「特色ある大学教育支援プログラム」に採択され、「大学と地域とが教育連携のなかで有機的に結合しようとする優れた取り組みである」と高い評価を得ました。さらに2017年4月、伝統産業の継承と発展をめざすべく「伝統産業イノベーションセンター」を開設。京都に存在する大学として、地域貢献を積極的に推し進めています。

『木野通信』第40号より 中尾ハジメ巻頭言

「マンガが作り出し出している現実の文化、そして社会については言うまでもないでしょうが、その独自性と可能性をさらに広い世界で実現させていくマンガ学部は、文字通り先端的な大学教育の挑戦です」



『木野通信』第1号より 美術学部長橋田二郎 「学外実習制度十周年を迎える」

「当時、大学の正規のカリキュラムにこのような制度を取り入れるのは珍しく、世界的な文化都市であり、また多くの種類の工芸品を生産している京都と大学の美術教育をなんとか結びつきたいと考えたのです」



実習の様子

「国際」をキーワードにみる 京都精華大学の歴史



KINO

木野評論

『木野評論』にみる 精華イズムの気概と精神

精華イズムにあふれた 脱アカデミズム評論誌

1968年に京都精華短期大学の前身である京都精華短期大学が開学。『木野評論』はその2年後に創刊された大学発の評論誌です。大学の発行物といえば研究論文をまとめた紀要が一般的ですが、精華では「アカデミズムに閉じこもった冊子では面白くない！」と、評論誌を発行。創刊号の巻に掲載された、初代学長・岡本清一の「思想解体の思想」には、特定の価値観を絶対化することなく、新しいものへの挑戦を尊重する精華イズムがあふれており、日本最高水準の知的な世界を精華からつくり出そうという気概が感じられます。

このように『木野評論』では、精華の自由自治の精神を反映したリベラルな論調で、政治・経済・社会・文化全般について幅広い評論を発信。また『木野評論』が発する気概は学生をも感化していき、

1977年には学生による『海賊版・木野評論』が登場。「精華を断罪せよ」という特集が組まれるなど、批評精神が学生にまで浸透していたことがわかります。

その後も『木野評論』は進撃を続けます。29号より市販化を実現。著名な文化人からの寄稿も加え、世の中を先取りしたテーマと批評的な内容でコアな読者層を獲得。

2006年には河出書房新社に出版元を移し、『KINO』としてリニューアル。残念ながら2008年に休刊となりましたが、日本初のマンガ学部を開設した本学ならではの切り口で、アート、マンガ、ポピュラーカルチャーにせままりました。その後、2016年に発表したダイバーシティ推進宣言など、創造的挑戦を続ける精華イズムは今も変わりません。情報館では貴重な創刊号を含む『木野評論』全巻を収蔵。今なおお色あせない先人のボイスに触れてみてください。

『木野評論』の進化



『KINO』vo.1



『木野評論』29号



『木野評論』創刊号



2006年 河出書房新社刊
2006年より『KINO』としてリニューアル。マンガ学部開設を記念して創刊号では「マンガ新世紀宣言」と銘打ち、人気漫画家や編集者の対談やロングインタビューを多く掲載。



1998年 青幻舎刊
記念すべき市販化第一号。宮台真司×鈴木隆之、吉本隆明×笠原芳光など著名ゲストと本学教員が対談。流行文化について論じた一冊。



1970年 京都精華短期大学刊
教員陣から職員まで幅広く寄稿する同人誌的な冊子として創刊。幸徳秋水論から、後に学長に就任する坪内成晃による風刺画など、剛柔あわせ持つ贅沢なラインナップ。

2010-2014

坪内 成晃

イラストレーター。1944年、京都市生まれ。京都市立美術大学（現京都市立芸術大学）卒業。京都精華短期大学助手を経て、京都精華大学デザイン学部教員。2010年から2014年まで学長を務める。



1968年セイカ誕生

1968年は改革、反乱の時代とよばれた。社会、文化が大きく変貌した年である。世界的に広がったベトナム反戦運動。プラハの春。R・ケネディ、キング牧師暗殺。三億円事件。カウンター・カルチャーの台頭。そして全学連学生運動の激化。そんな年、洛北岩倉の山ツツジが咲きほこる原野に、自由自治の京都精華大学（当時短大）が生まれた。岡本初代学長は、大学は半世紀を経てはじめて歴史となると語られた。私たちはこの50年、どのような役割を担えたのだろうか。これからの不確実な時代に未来を築けるのか、真価が問われる。

1997-2006

中尾 ハジメ

1945年、東京生まれ。自称「ヒッピー生活」を経て、1975年から京都精華大学教員。「英語」「社会調査法」「環境ジャーナリズム」などを担当。1997年から2006年まで学長を務める。

りでも講義中心主義からはなれ正規科目として国内外での長期フィールドワークを置いたが、日本初のことだった。人文学部の「環境マネジメント実務演習」と「日本語リテラシー」、芸術学部の「学外実習」は、学生の主体性を生かす改革事例として文科省の特色ある大学教育支援プログラムにも認められた。マンガ学部設置はもちろん、京都国際マンガミュージアムを地域社会の理解を得て開設したことも、「因襲的な過去から断絶している」大学ゆえの達成だった。その大学づくりを途切れなく前進させたのは事務局職員の方だった。今は亡き事務局の田所伴樹、杉本修一、景山喜巳、3氏それぞれの奮闘と決断と配慮を忘れることは出来ない。

入学式の朝顔

私にとっては晴天の霹靂。学長選挙の結果あなたが選出されたとの連絡があり、固辞するも受け入れられず。最初の仕事は入学式の挨拶。新入生に何を語ればいいのか、壇上で絵を描くことにした。祝辞を述べたあと、前日研究室で作成したベニヤ板に紙を貼った縦長のキャンバスに、墨汁とアクリル絵具で一気に「朝顔」を描いた。上着を脱いだのか墨の飛沫が白いワイシャツに黒々として残っている。



1995-1997

斎藤 博

京都精華大学が短期大学として開学した1968年より40年もの長きにわたり、洋画を専門分野として学生たちの指導にあたる。1995年から1997年まで学長を務める。

あのごろのセイカ

学長が振り返る

京都精華大学で学長を務めた3人の先生方に、当時の思い出や大学に対する想いをイラストや文章で表現してもらいました。

新しい画布のように

われわれの大学は新しい画布のように、一切の因襲的な過去から断絶している——1968年度の大学案内にある岡本清一学長による宣言だ。自由平等の理想のもと現実的な経営計画なしに始まったこの大学は、それゆえの危機に何度も直面する。不可避免だった教職員数の拡大とともに、直接民主主義の場「教職員合同会議」は形骸化した。専任の教員と職員のあいだに給与差はない。身分差のない空気は居心地がよく、硬直化をまぬがれ、新しい大学づくりの試みを繰り返すことができた。

1979年の美術学部設置につき1989年には短大の英語英文科を人文学部につくりかえるが、両学部あわせても約3000名の受験生しかない。これではやがて始まる受験生人口の急減に生き残ることはできず、この大学は前年度踏襲主義の予算運営の壁をやぶり入試広報費を一挙に4倍の2億円にしてしまった。カリキュラムづく

多様性とめざすべき社会

2018年4月、多様性を尊重するキャンパスづくりを推進してきた竹宮恵子に代わり、人文学部教員のウスビ・サコが新学長に就任する予定です。「多様性」をキーワードにした2人の対談から見えてきたのは、「社会の通念にとらわれない学生を育てたい」という共通する想いでした。

他者の多様性を理解することを当然と思っていた幼年・青年期

竹宮 2014年に学長に就任してから、いくつかの改革に取り組みました。そのひとつが「ダイバーシティ推進宣言」の発表です。この宣言では、多種多様な人間によって形成される「大学」という場所で、すべての構成員が自分と異なる境遇や価値観を持つ他者への理解を深め、共助の精神を身につけることをめざしています。

サコ 「自分と異なる境遇や価値観を持つ他者」については、どのようにお考えですか？

竹宮 わたしは小学生の頃から、



竹宮 そのようなとき、差別されているとは思わなかったんですか？

サコ 思いませんでした。わたしは「差別」ではなく、情報が足りていないことによる「区別」だと考えています。それは認識が変わることで改善できるものです。たとえば「日本人はアフリカをバカにしている」と怒る人がいれば、わたしは「それならどうすれば相手にアフリカの良さを知ってもらえるか、あなたが考えて行動しよう」と提案します。

多数派の認識を変えることで少数派を特別視しない社会へ

竹宮 「多様性を尊重する」というとき、社会的強者から弱者を気づかうような視点になる場合がありますね。わたしは、重要なのは「特別視をしない」ということだと考えています。なにが属性の違いによる摩擦があったとしても、

過剰な対応を



誰もが持つものと理解し、認め合



ウスビ・サコ 学長就任予定者

人文学部教員。マリ共和国出身。北京言語大学、南京東南大学などを経て京都大学大学院工学研究科建築学専攻博士課程修了。本学ではコミュニティ論などを教える。



まわりが「あの人はつきあわない方がいい」といわれる人がいれば、よく知りもしないのに敬遠する態度のほうを疑問に思い、あえて交わりに行く性格だったんです。それに漫画家として、性別、年齢、国籍、ときには惑星まで異なる登場人物をたくさん創造してきました。その経験から、たとえ異世界の人物やキャラクターであっても、想像力をはたらかせればその立場になって考えることができると思っています。サコさんはどんな幼少期を過ごされたのですか？

サコ わたしはアフリカのマリ共和国の首都で生まれ育ちました。兄弟は3人ですが、実家では常に20〜30人が一緒に生活していました。マリには23の民族があり、宗教も言語も異なる人々が集合居住していることが多く、そのような環境では自然と多様性を認識するようになります。でも中国へ留学すると、当時はアフリカ人がめずらしかったでしょう、あれこれ言われました。手を洗っていたら「肌の色は落ちないんだね!」と驚かれたこともあります。来日してから似たような体験はありませんね。

多様性を認める精華の環境で社会の通念から自由になる

竹宮 来年4月から学長職をバトンタッチすることになりますね。4年間、さまざまな改革に取り組んできましたが、まだまだ変えきれていない部分が多いので、ぜひサコさんに推進してほしいです。サコ わたしが次期学長に選ばれたとき、ニュースではよくアフリカ人であることが話題になりました。ですが、精華の教職員がわたしを選んでくれたのは「サコと一緒に仕事をしたい」という感覚によるものです。学生たちもわたしを特別視せず、「サコさん」と呼んで、いち教員として接しています。そんな精華の環境で学んだ学生には、将来的に、めざすべき社会へ世の中を引っ張っていくリーダーシップが培われると期待しています。たとえばこれからの社会はAI技術の発展やIT化が進むことによって、今より人間の仕事

がなくなるといわれているけれど、大切なのは「それらを活用していかしあわせな社会をつくるか」を考える感性です。学生たちには精華の教育環境を通じて、社会の通念にとらわれず、自由な感覚を持てる人へと育ててほしいです。

竹宮 恵子 現学長

マンガ学部教員／漫画家。『風と木の詩』『地球(テラ)へ...』で小学漫画賞受賞。2014年紫綬褒章受章。内閣官房知的財産戦略本部員、中央教育審議会委員などを歴任。

することなく、普通に謝ったり、説明したりすればよいのです。

サコ いわゆるマイノリティ(社会的少数派)へ優遇措置をとるなどに対応する、という考え方で進めてきたのが日本の今までのやり方です。精華はもっと広い視点で、マジョリティといわれる物言わぬ多数派の認識を変えることに

取り組んできたと思っています。与えるという発想ではなく、違いは

い互いに成長するんです。この対談のテーマは「多様性とめざすべき社会」ですが、多様性というのは、そもそもすでにあるものなんです。重要なのは、それをどう認識していくかです。竹宮 この春開設した寮(国際学生寮・修交館)がその象徴ですね。留学生と日本人学生がベアでひとつの部屋に住むことで、言葉や生活習慣、宗教などの違いから、小ささまざまな問題に直面せざるを得ない。摩擦は起こりますが、そうした経験こそが互いの壁を乗り越え、心を通わせるうえでの大切な学びとなります。

News & Topics

News 01

新理事体制が決定。
理事長に石田 涼が就任。



理事長／石田 涼

2017年12月25日に開催した理事会において、石田 涼(いしだりょう)を新理事長に選任しました。任期は2017年12月25日から2020年12月24日までの3年間です。石田は私立高等学校教諭を経て1989年に入職。教務部、企画室などを経て、1999年より現在まで理事に選任されています。新年に開かれた仕事始め式での、新理事長として初の挨拶では、教職員に向けて次のように語りました。「現在はこれまでの常識が通用しないパラダイムシフトが起こる転換期。未来を生きる存在である学生たちに向かって、より新しい発想でこれからの教育のあり方を考えていきたいと思っております。皆さんどうぞご協力ください」。

〈新理事体制〉
理事長／石田 涼(新任)
学 長／竹宮 恵子(在任期間中)
専務理事・常務理事(経営企画担当)／武田 恵司(重任)
常務理事・副学長(教学担当)／吉岡 恵美子(新任)
常務理事・副学長(教育企画担当)／吉村 和真(重任)
常務理事(総務担当)／細谷 周平(新任)
理 事／櫻井 謙次(在任期間中)
井上 琢智(新任)
中村 久義(新任)
山本 綱義(新任)
監 事／位ノ花 俊明(在任期間中)
崎間 昌一郎(重任)
堂山 道生(重任)



■学長指定課題研究費

本学の学術研究および教育の向上を目的に、学長が指定する特定の課題・テーマに則した研究を推進する制度。

〈2017年度課題・テーマ〉

- ①多様な学生の支援に関する研究
- ②2017教学改革を推進するための研究
- ③教職員の資質向上に関する研究
- ④地域社会の課題解決を目的とした研究(条件:対象地域は京都府、京都市、長浜市、精華町。外部組織・団体との連携必須)

〈2017年度採択結果(一部)〉

- 障がいのある学生支援に関する学内連携体制づくりに関する研究
一教職員・学生向けの意識啓発活動を中心に一
(人文学部／住友 剛)
- 西陣呼称550年に伴う織り屋を中心とした西陣の実践的考現学
(デザイン学部／米本 昌史)など

News 02

本学独自の研究活動支援制度。

本学独自の研究活動支援制度について、2017年度の採択結果を下記の通りご報告します。制度はいつでも2016年から開始しました。

■個人研究奨励費

積極的に研究に取り組む教職員を支援するために、作品制作を含む全専門分野における個人での研究活動を広く対象として助成する制度。

〈2017年度採択結果(一部)〉

- 公的集合住宅のリノベーションに関する研究(デザイン学部／葉山 勉)
- 『アカデミズムにおけるマンガ教育』と『商業マンガ制作』におけるマンガ創作手法。～その現状、差異と課題～(マンガ学部／西田 真二郎)
- コミュニティ再生に関する実践的研究
一京都の長屋、町家再生調査を中心に一(人文学部／ウスビ・サコ)
- 1990年代ファッション再考(ポピュラーカルチャー学部／蘆田 裕史)
- 谷崎潤一郎に関する詳細年譜作成と研究文献の網羅的な収集
(人文学部／西野 厚志)
- 無線通信機能を備えた超小型コンピュータによる、メディアアート・コンピュータ音楽作品の制作とメディアアート教育への利用研究
(芸術学部／平野 砂峰旅)
- 岡本清一思想と京都精華大学の理念(法人本部／石田 涼)

EVENT REPORT

岡本清一記念講座 公正と自由

一欲望の『奪い合い』から幸福の『分かち合い』へと財政を変える一

講師：井手 英策(慶應義塾大学経済学部教授)



田添 さつきさん
人文学部歴史専攻3年生。日本の近代思想史を中心に勉強中です。最近念願の宝塚歌劇の鑑賞を果たし、はまってしまいそうで恐怖と喜びに震えています。

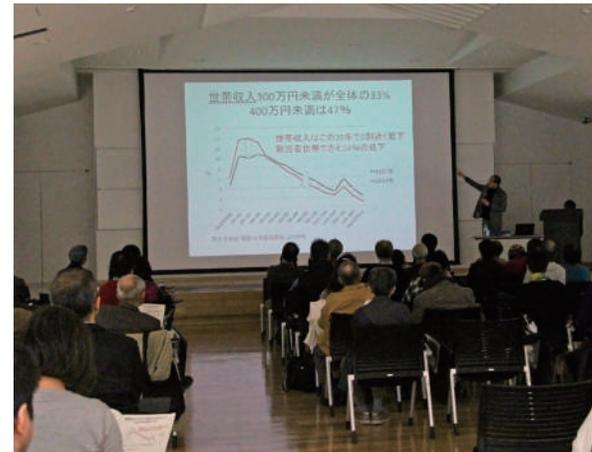
社会では、頑張っているのに救われない人々や何らかの事情で頑張ることのできない人々の声は拾い上げられにくく、自己責任の一言で切り捨てられてしまっています。この「道徳」と「自己責任」の狭間で多くの人々が苦しみ、生きづらさを感じているのが現代の日本社会なのです。また、井手さんは詳しいデータを挙げながら、ここ20年で国民全体が経済的に貧しくなっていることを示し、新しい社会・社会民主主義の必要性を説かれました。これは、例えば所得の高低に関わらず皆が同率の税を負担し、皆に定額の現物給付として還元することで、一部のみへの既得権をなくす、といったような、全員が頼り合える社会の在り方を指します。このように、誰もが不安におびえる時代だからこそ、現在の経済成長ありきの社会システムから、人間の尊厳を持ちながら支え合える社会への変革を提唱されました。

現状を打破することに疲れ、半ば諦めきっている世の中の雰囲気があります。わたしたちの世代も同じです。ニュースや授業の話の聞くたび、無意識に考えることをストップしている自分をいつも感じます。なので、ここで安易に締めめの常套句をつかいたくありません。向き合う姿勢を持ち続けることを放棄したくないからです。うっかり歴史を専攻してしまっただけは日々現実に打ちのめされています。それでも、ああ、社会や自分を問い続けるしかないんだな、と重い腰をひきずった――わたしにとって、そんな講演会でした。

生きづらい社会について
悩み、考え、問い続ける。
想像できそうでできない、できそうでしたくない。自分や社会の未来の姿を考えようとするとき、わたしはいつもそんな感覚を覚えます。それは、未来に対してあまり希望を見出せていないからです。それは、いまの社会で、常にとどこかで生きづらさを抱えているからです。
わたしが学ぶ人文学部では日々さまざまな視点から社会にアプローチし、過去・現在・未来の在り方を問い続けます。今回

の講演では、そんなわたしたちの「生きづらさ」をスタートに、慶應義塾大学教授・井手英策さんより日本の理想の社会の仕組みについて具体的な財政政策を交えながらお話しいただきました。
はじめに井手さんは、「『経済の失敗』『道徳の失敗』と称して、「勤労や儉約などの通俗道徳は何物にも代えがたい美德であり、強固に守りさえすれば救われるはずだ」という日本社会に未だに根強く残っている社会的な通念を批判的に指摘されました。そのような通念の色濃い

社会では、頑張っているのに救われない人々や何らかの事情で頑張ることのできない人々の声は拾い上げられにくく、自己責任の一言で切り捨てられてしまっています。この「道徳」と「自己責任」の狭間で多くの人々が苦しみ、生きづらさを感じているのが現代の日本社会なのです。また、井手さんは詳しいデータを挙げながら、ここ20年で国民全体が経済的に貧しくなっていることを示し、新しい社会・社会民主主義の必要性を説かれました。これは、例えば所得の高低に関わらず皆が同率の税を負担し、皆に定額の現物給付として還元することで、一部のみへの既得権をなくす、といったような、全員が頼り合える社会の在り方を指します。このように、誰もが不安におびえる時代だからこそ、現在の経済成長ありきの社会システムから、人間の尊厳を持ちながら支え合える社会への変革を提唱されました。



京都精華大学展2018 ―卒業・修了発表展

2月14日(水)～2月18日(日)
【場所】 京都精華大学

学びの集大成となる卒業・修了発表展。今回からキャンパス全体を使って、すべての学部・研究科の作品展や成果発表報告を行います。同時にライブペインティングやトークイベントなども企画しています。学部を超えた協力体制で、初の試みにのぞみます。

【問い合わせ先】
京都精華大学 広報グループ
☎0120-075-017



OPEN CAMPUS

2月18日(日) 11:00～16:00
【場所】 京都精華大学

高校生やその保護者を主な対象に、大学説明会や学部・学科ごとの「学び」や「施設」を体験できるイベントを多数開催します。当日は卒業・修了発表展との同時開催となるので、学生たちの作品や成果発表報告もあわせて楽しむことができます。

【問い合わせ先】
京都精華大学 広報グループ
☎0120-075-017



アセンブリーアワー講演会
喜多郎コンサート&トーク
「(題名未定)」

2018年2月17日(土) 18:00開演(17:00開場)
※予約不要、入場無料、先着順

【出演】 喜多郎(音楽家) / 岡野 弘幹(音楽家)
【会場】 京都精華大学 明窓館M-201講義室

卒業・修了発表展終盤の土曜日に、世界的に活躍する音楽家の喜多郎氏を迎え、コンサートを開催します。企画や演出には在学生も参加しています。

【問い合わせ先】
京都精華大学 社会連携センター
☎075-702-5263

ギャラリーフール展覧会

【場所】 京都精華大学 ギャラリーフール

- 1年生研究制作展 1月29日(月)～2月3日(土)
- 2年生修了制作展 2月14日(水)～2月18日(日)
- 消滅と再生、幻想の物語 2月28日(水)～3月10日(土)
- 書物の感覚 3月13日(火)～3月28日(水)

【問い合わせ先】
京都精華大学 ギャラリーフール担当
☎075-702-5263

OB&OG

09



「JUEN 光陰」吉野央子

土地・生活・人々の魅力を再発見する芸術祭に卒業生や教員が参加。

「奥能登国際芸術祭」にて、アーティストとして活躍する卒業生、塩田千春さんは能登の塩づくり、麻生祥子さんは能登の信心の形、芸術学部教員 吉野央子は海辺の街をテーマに作品を制作しました。また、クリエイティブディレクターとして、デザイン学部の浅葉克己客員教員も参加されました。

Student

10



たったひとりで企画・運営、広報まで。音楽をテーマにした映画上映会。

音楽をつくるだけでなく、聴く人にどう伝わるのかまでも重視する音楽コース。同コース4年生の越智海人さんは、卒業制作として音楽をテーマにした映画上映会を各地で実施しました。上映会のスタッフは、越智さんたったひとり。上映場所の交渉や運営、広報、ときには関連イベントの司会までを自ら行いました。

Teacher

11



知られざる文化に目を向ける。京都民芸資料館にて「高松張子展」を開催。

京都民芸資料館秋の特別展に人文学部教員 山名伸生が協力しました。「高松張子」は素朴で愛らしい郷土玩具。山名は公的な美術史の流れに入らない品々を長年にわたり収集しています。今回の特別展は作品の面白さと作者の豊かな感性を素直に感じ、消えゆく無名の「美」について考える場となりました。

Student

06



西陣織にふれられる「NISHIJIN BUS」
本学の学生がプロジェクトに参加。

ライフクリエイションコースと西陣織工業組合、京都市交通局が連携して取り組んだ「NISHIJIN BUS」プロジェクト。京都市内を走るバスに、西陣織を搭載するという学生のアイデアをベースにプロジェクトが進行し、外装だけでなく、シートや吊り革などにも学生のデザインが使われました。

Student

07



建築コースの学生が設計。
団地リノベーションプロジェクト。

建築コースが京都市住宅供給公社と協働し、二軒茶屋団地の設計リノベーションを実施しました。学生が関わったのは3部屋で、2017年3月に工事が完了。春からは実際に在学生が入居しています。学生独自の目線で設計されたからこそ、「住みやすい」と入居者の学生から好評を得ています。

Student

08



©岩倉具弘/集英社

カートゥーンコースの学生が「第93回手塚賞」で佳作を受賞。

カートゥーンコースの1年生岩倉具弘さんの作品「No Face 宮本くん」が「第93回手塚賞」で佳作を受賞しました。目がない少女・初美をいじめから助けたヒーロー・宮本くんは顔のない少年だった…。そんな独特な世界観とストーリーが評価され、受賞につながりました。次回作にも期待が集まっています。

Student

03



“しゃべるゴミ箱”が
動画コンテストで審査員特別賞を受賞。

グラフィックデザインコースの学生4名の作品が「リノベーション 動画コンテスト」で審査員特別賞を受賞。動画の主演は、ゴミ捨てにきた人と雑談するゴミ箱です。コミュニケーションの減少という現代の課題解決につなげるため、“雑談”という概念をリノベーションしたユニークさが評価されました。

Student

04



ジェイアール京都伊勢丹
20周年記念ロゴマークコンペで
版画コースの学生が銅賞を受賞。

2017年に開店20周年を迎えたジェイアール京都伊勢丹。これを記念するロゴマークの公募で、芸術学部版画コース3年の永田聡子さんが銅賞を受賞しました。永田さんは芸術学部で学んだことを今回の制作にも役立て、この受賞を励みに今後もコンペなどに積極的に参加すると意欲を見せています。

Student

05



電車内の広告枠を学生がジャックした
レトロ電車が嵐電で運行。

中吊り広告、額面広告、電車のヘッドマークまで、すべての広告枠を学生作品でジャックした嵐電(京福電気鉄道株式会社嵐山線)のレトロ電車が2017年8月29日から9月18日まで運行されました。自分たちが嵐電に乗って感じた魅力を伝えられる「学生ならではの広告」をめざし、制作に取り組みました。

～ご支援くださる皆様へ～ (ご寄付のお願い)

京都精華大学は1968年に短期大学として開学以来、岡本清一初代学長による「新しい人類史の展開に対して責任を負い、日本と世界に尽くそうとする人間の形成」という理念にもとづき、実践的な教育と研究活動をおこない、社会へ貢献してまいりました。

今後も「自由自治」の精神を胸に、文化と芸術の創造と新しい社会の建設に携わる人材の育成を目的とし、本学ならではの教育・研究活動に邁進し、日本を代表する文化と芸術の大学として展開してまいります。

2018年度に創立50周年を迎える本学の教育・研究活動の充実、学生生活の支援のため、多くの皆様に温かいご支援・ご協力を心よりお願い申し上げます。

- 寄付募集Webサイト
<http://www.kyoto-seika.ac.jp/donate/>
- 古本募金 WEBサイト
<http://kishapon.com/seika/>
- お問い合わせ(リーフレット請求先)
京都精華大学 経営企画グループ 寄付募集担当
TEL 075-702-5201
FAX 075-702-5391
E-mail:kikaku@kyoto-seika.ac.jp

卒業生の方へ

住所等変更や『木野通信』の送付先の変更希望の方は、メールまたはFAXで変更事項を以下の宛先へご連絡ください。

- お問い合わせ
京都精華大学 経営企画グループ 木野会事務局
E-mail:kinokai@kyoto-seika.ac.jp
FAX 075-702-5391



『Helios(ヘリオス)』

素 材：陶器
サイズ：500×500×5cm



(部分)

「Our life is an endless form of repetition and multiplicity」

アルベルト・ヨナタン

京都精華大学大学院芸術研究科博士後期課程在学中。インドネシア出身で現在京都を拠点に活動中。2013年の第55回ヴェネツィア・ビエンナーレではインドネシア館代表アーティストの一人として最年少で選出される。2017年には東京のポーラミュージアム アネックスでの個展開催や、国立新美術館と森美術館で開催された東南アジアの現代アーティストのグループ展「サンシャワー」にも参加。今年は「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ2018」に参加の予定。

京都精華大学

芸術学部 [造形学科] 洋画専攻 日本画専攻 立体造形専攻 陶芸専攻 テキスタイル専攻 版画専攻 映像専攻	デザイン学部 [イラスト学科] イラストコース [ビジュアルデザイン学科] グラフィックデザインコース デジタルクリエイションコース [プロダクトデザイン学科] プロダクトコミュニケーションコース ライフクリエイションコース [建築学科] 建築コース	マンガ学部 [マンガ学科] 新世代マンガコース カートゥーンコース ストーリーマンガコース キャラクターデザインコース マンガプロデュースコース ギャグマンガコース [アニメーション学科] アニメーションコース	ポピュラーカルチャー学部 [ポピュラーカルチャー学科] 音楽コース ファッションコース	人文学部 [総合人文学科] 文学専攻 歴史専攻 社会専攻	大学院 芸術研究科 デザイン研究科 マンガ研究科 人文学研究科
---	---	--	--	--	---

木野通信

KINO PRESS.

木野通信 第70号
2018年1月31日 発行

京都精華大学 広報グループ
〒606-8588 京都市左京区岩倉木野町137
TEL 075-702-5197 www.kyoto-seika.ac.jp

『木野通信』第69号において「マンガプロデュースコース」と「ギャグマンガコース」の表記漏れがございました。関係各位、読者の皆様に謹んでお詫い申し上げます。